慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H・エクシュタイン T・R・ガー共著「権威の類型」
Sub Title	Harry Eckstein and Ted Robert Gurr Patterns of Authority : A
	Structural Basis for Political Inquiry
Author	霜野, 寿亮(Shimono, Toshiaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	1979
year	
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and
	sociology). Vol.52, No.6 (1979. 6) ,p.95- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00224504-19790615-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



Harry Eckstein and Ted Robert Gurr

Patterns of Authority:

A Structural Basis for Political Inquiry

(Comparative Studies in Behavioral Science:

A WILEY SERIES)

A Wiley-Interscience Publication, John Wiley & Sons, Inc., 1975

T・R・ガー 共著

「権威の類型」

支配者であるかは別にして、政治現象の中核には、少数の代表者とかかる少数者が、選ばれた指導者であるか、あるいは力にまかせたに直接関与し命令を発する特定少数の人達を含むのが普通である。に直接関与し命令を発する特定少数の人達を含むのが普通である。味は大きい。国家政府にせよ社会集団にせよ、それらは集合体とし政治現象のなかで指導―追従関係ないし支配―服従関係の持つ意政治現象のなかで指導―追従関係ないし支配―服従関係の持つ意

に終始するか、権力論のなかに埋没してきたからである。 に終始するか、権力論のなかに埋没してきたからである。 に終始するか、権力論のなかに埋没してきたからである。 に終始するか、権力論のなかに埋没してきたからである。 に終始するか、権力論のなかに埋没してきたの構成する二極関係が常に存在すべきかについては、昔から多くので記と服従、指導と追従の関係をありのままに見つめ、それを明確支配と服従、指導と追従の関係をありのままに見つめ、それを明確支配と服従、指導と追従の関係をありのままに見つめ、それを明確支配と、存在せている。こうした少数者による支配が、存在すること、存在せている。こうした少数者による支配が、存在すること、存在せている。 「支配社会学」に代表される先駆的な社会学的研究を除けば、これである。

概念の整理や調査研究の基礎としてそれらが有効に作用することは概念の整理や調査研究の基礎としてそれらが有効に作用することは概念の整理や調査研究の基礎としてそれらが有効に作用することは概念の整理や調査がなされるようになつてきた。それは、政治現象への解明の手がかりを得るためという点からしても、支配や指導関係の解明の手がかりを得るためという点からしても、支配や指導関係のがいと痛感されてきたからである。このような試みの早いものとしては、たとえばH・D・ラスウエルが「権力と社会」のなかで、しては、たとえばH・D・ラスウエルが「権力と社会」のなかで、しては、たとえばH・D・ラスウエルが「権力と社会」のなかで、権力と勢力の類型化や、権力の所有と権力の行使の概念的区別など権力と勢力の類型化や、権力の所有と権力の行使の概念的区別など、での諸研究では、概して分析枠組の体系化に少なからず難点があり、新たなし、最近、といつても十数年も前からであるが)になり、新たなし、最近、といつても十数年も前からであるが)になり、新たなし、最近、といっても、大きにない。

(五) (七二)

エクシュタインは

が、これから紹介する本書である。著者のうち、

ほとんどなかつたと言つてよい。そうした 現状 に一石 を 投ずるの

文に忠実な記述ではないことをお断りしておきたい。

は ける特定構造への関係づけではなく、 まつた。さらに私的統治組織と公的統治組織をどこで区別するのか して西欧的国家の統治組織と政治を同一視したことは、発展途上国 を明らかにしてゆく。かつては、政治を国家の統治組織(state-organ-著者は政治概念の系譜を吟味することにより、権威類型概念の利点 明にとつて有効であるという本書の基本的発想が展開されている。 難点は、 政治の概念 規 定をはかることが考えられた。 だが、 機能的見方の という問題も出現してくる。そこから、時間的空間的制約を強く受 の政治分析に困難を生じ、歴史的にも普遍性を欠くことになつてし ization)に関係して定義づけることがなされていた。しかし、主と 第一部では、著者の言う権威類型に着目することが政治現象の解 その一般化の度合を高めてゆくと、 政治に特有な機能の確定が困難なことにある。機能的見方 なにか固有な機能に注目して 政治の普遍的機能として

をしたことにはならないという。社会現象が"政治』に含まれてしまうことになり、政治の概念規定"社会秩序の維持"としか言いえないのである。これではあらゆる

政治的非対称的関係を区別するために、三つの基準を導入する。 に答を出したとは言えない。それで著者は、ただの非対称的関係と である。そして、このために著者が選び出したのが、G・E・ うことである。そして、このために著者が選び出したのが、G・E・ うことである。そして、このために著者が選び出したのが、G・E・ うことである。そして、このために著者が選び出したのが、G・E・ うことである。そして、このために著者が選び出したのが、G・E・ うことである。そして、このために著者が選び出したのが、G・E・ うことである。そして、このために著者が選び出したのが、G・E・ うことである。そして、このために著者が選び出したのが、G・E・ うことである。そして、このために著者が選び出したのが、G・E・ うことである。そして、このために著者が選び出したのよいで、 かかる事態のなかで著者が目ざすのは、機能的見方によらないで、

分ないし人々の間で生じたり生じなかつたりし、また、そうした部 かないし人々の間で生じたり生じなかつたりし、また、そうした部 を有する。このように生ずる非対称的関係は政治的と考えられうる による同一化を受け、その成員は社会的単位とは次の如き性格を有 が、ほかはそうではない。なお、社会的単位とは次の如き性格を有 が、ほかはそうではない。なお、社会的単位とは次の如き性格を有 では、社会的相互作用は持続し類型化する。(○社会的単位は成員 間では、社会的単位のなかには一組の分化した役割がある。 による同一化を受け、その成員は社会的単位は成員たちとは独立した目的を有す。(○社会的単位のなかには一組の分化した役割がある。 た目的を有す。(○社会的単位のなかで、社会的単位 た目的を有す。(○社会的単位のなかで、社会的単位 たりする。このように生ずる非対称的関係は政治的と考えられらる からなて自己の でイデンティティを獲得する。(○社会的単位のなかで、社会的単位 では、社会的単位のなかでは一組の分化した役割がある。

かわる指令に関連したりしなかつたりする。この指令に関連する非その関係に影響を与える社会的単位内の非対称的関係は、単位にかはない。基準皿・階統的水準間の関係のなかで生じたり、あるいは響を与える非対称的関係は政治的と考えられうるが、ほかはそうで順位づけられた部分の間で生じるか、それらの関係に明らかに影響を与えたり与えなかつたりする。階統的分間の関係に明らかに影響を与えたり与えなかつたりする。階統的

ば、政治をこのような権威類型として捉えることは、政治概念に広 thority pattern) と呼ぶのである。そして活動や役割や装 置がポジ らない権威類型の解明から、今日の統治組織の解明にまで役立ちう に有効である。このように、この見方は、明確な統治組織の形をと 発展していないところでも、 また、この政治概念は、国家の統治組織が存在していないか高度に がら、研究者の関心をはるかに越えるほどの広さとなることはない。 うことにより、帰納科学の基礎としても十分に適切な範囲を有しな ての政治研究という考え方は、どこにでも繰りかえし起る現象を扱 の概念を獲得することになるという。すなわち、権威類型研究とし 者の雑多な関心と個別科学としての統合への配慮を調和させる政治 がりを与える包括性と政治概念をせばめる同質性を両立させ、研究 の構造を示す名称として、権威の語が用いられている。著者によれ ティブであれネガティブであれ正当性の感情を喚起する権威類型内 対称的関係は政治的であるが、ほかはそうではない。 る手がかりの獲得を可能とし、 著者はこれら三つの基準をみたす非対称的関係を権威 国家の統治組織に匹敵するものの確認 興味深い研究領域を放置してしまう 類型 (au-

危険をさけることができるとしている。

昧であるという。著者がめざすのは、変化に富んだ多くの権威類型 者によれば、権威類型の記述や分類は政治学を中心になされてきて である。著者の示す六つの局面とその次元について順次概観すると 対極を結ぶ連続線であり、各権威類型は程度に応じてこの連続線す 面 互に比較を可能とするような概念図式である。このために著者が用 を体系的に記述し、それによつてデータを統合的に集積し、 いつきで名称を付しているために、提出されてきた概念は極めて曖 いるが、これまでの試みは体系的でなく、国家のみを対象とし、思 とにしよう。ただし、下位次元については省略した。 なわち次元上のどこかに位置づけられる――を引き出すという方法 ―を抽出し、その各々に限られた数の次元(dimension)――これは いる視点は、権威類型の定義の精密な吟味から、権威類型の主要局 第二部では権威類型を考察するための枠組が呈示されている。 ――これは当然に上位者対下位者という権威関係が中心となる― かつ相

イ・上位者―下位者間の勢力関係。この局面は上位者が下位者に下す統制の程度を対象とし、これには四つの次元が設定されていた。(1指向性(directiveness)――これは社会的単位の活動が指令にな。(1指向性(directiveness)――これは社会的単位の活動が指令にたう程度であり、その対極は参加と非参加である。(3)応答性(responsive-fi為であり、その対極は参加と非参加である。(3)応答性(responsive-fi為であり、その対極は参加と非参加である。(4)応諾性(compliance)――これは上位者が下位者の反応を受け入れる傾向であり、下す統制の程度を対象とし、これには四つの次元が設定されている。(4)応諾性(compliance)――これは上位者が下位者に同い方式に対している。(4)応諾性(compliance)――これは対象に対象とし、これには四つの次元が設定されている。(4)応諾性(compliance)――これに回いる。(5) には対象とし、これには四つの次元が設定されている。(5) には対象とは対象というに対象に対象というに対象というに対象というに対象としまれに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象に対象というに対象となるというに対象というないのは対象とののに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というに対象というのは対象というに対象というに対象というに対象とのは対象というに対象というののに対象とのは対象とのは対象に対象とのは対象とのは対象とのは対象とのは対象とのは対象とのは対象

は上位者と下位者の一般的価値に差異があるという不平等感覚にあり、二つの次元が設定されている。⑴距離(distance)―― これこれは上位者が下位者に対して持つ優越性の程度にかかわる局面で諾と反抗が対極に位置している。Ⅱ・上位者―下位者間の不平等。諾と反抗が対極に位置している。Ⅱ・上位者―下位者間の不平等。

者どうしの相互作用の仕方が常に関係している。著者は上位者どうさて、社会的単位のなかで下位者が指令を受ける仕方には、上位ある。

目にみえたちがいに関連している。上位者からみたとき次元の対極

にあるのは尊大と親愛であり、下位者からみたときは追従と親愛で

れの側からみても、その 次元の対極は 高揚と 下降 である。②振舞関連している。この感覚は上位者も 下位者も共 に 有 するが、いず

(deportment) ——これは上位者ないし下位者が相手を扱う仕方の

V・上位者補充の様式。これは誰が上位者になるべきか、あるいは上位者になれるかという競争とみなされる。権威類型によつては上上位者になれるかという競争とみなされる。権威類型によつては上上位者になれるかという競争とみなされる。権威類型によつては上上位者になれるかという競争とみなされる。権威類型によつては上上位者になれるがらいるところも、世襲的に固定されているところもの地位が完全な自由競争にゆだねられている。以・正統性の根拠。権を対極に持つ補充の次元が考えられている。以・正統性の根拠。権を対極に持つ補充の次元が考えられている。以・正統性の根拠。権によれば、かかる正統性根拠の順位づけに利用できる特定の次元を成類型が正しく構成され、それゆえに支持に値するという感覚を支配する諸価値が正統性根拠の指標として使うことである。すなわち、権成類型の諸次元を規範・実践・形式の視点からそれぞれ個別に評価を類型の諸次元を規範・実践・形式の視点からそれぞれ個別に評価を類型の諸次元を規範・実践・形式の視点からそれぞれ個別に評価を表ることは困難である。ないるといるといるのである。

調整し、③目標に関する最高指令または最終調整を示し、40希少資料を多くの方法で採集しなければならないと著者は主張する。第資料を多くの方法で採集しなければならないと著者は主張する。第資料を多くの方法で採集しなければならないと著者は主張する。第6、特にその中枢部分に注意する必要がある。具体的作業としては、り、特にその中枢部分に注意する必要がある。具体的作業としては、り、特にその中枢部分に注意する必要がある。具体的作業としては、第三部では権威関係を経験的に調査するやり方の要点が簡単に述第三部では権威関係を経験的に調査するやり方の要点が簡単に述

単位が権威類型か否かの判定も可能になるという。 単位が権威類型か否かの判定も可能になるという。 単位が権威類型か否かの判定も可能になるという。 単位が権威類型が否かの判定も可能になるという。 (下位の社会的単位の構造は解明しえたことになり、その社会的 単位が権威類型があるか)、(4)非連続性(中枢の時間的消長)に 決しているが)、(3)多様性(階統の各 ができるならば社会的単位の構造は解明しえたことになり、その社会的 単位が権威類型か否かの判定も可能になるという。

ている。

体か)、(3)成員資格が強制されるのか 任意 にまかされるのか、 範と実践は人々の意識や行為のうちに秘められているので、質問紙 文書によつて決定されているから、それを参照すれば良い。また規 を規定し、(3)持続的な権威関係の型に関連しているところの規定的 形式の観点から説明している。 たらよいのか。著者はこの点について、すでに示した規範・実践・ 度、⑤社会的単位が権威主義的か平等主義的か。それでは、かかる 会的単位が権威関係の次元すなわち成員の行動に及ぼす優越性の程 る。(1)規模、(2)原子的単位対有機的単位(均一的集合体か機能的分業 なる。著者が試験的と断つて提示しているのは次の五つの次元であ 記述にとつては、①権威類型の上位者と下位者が権威関係の各次元 法による資料収集が有効であるとする。そして、権威類型の総合的 の上位者によつて承認され、②人々または役割に対して権 威 関 構造の解明や比較を行なうために必要な資料をどのよう に し て 得 ところで、幾つかの社会的単位を比較するには別の枠組が必要と 権威関係の形式は、⑴社会的単位 (4) 社 係

にどれだけ一致しているのかを明らかにすることが大切であるとしと下位者はどれだけ一致しているのか、⑷規範・形式・実践は相互の次元で規範と実践の資料を集約し、⑶規範と実践に関して上位者に対して持つ規範と実践のマトリックスを作り、⑵社会的単位全体

残余がない)、③不明確ではなく(いずれに属するかわからぬ事例がない)、 る分類であることが多く、一分類項目に雑多な事項がはいりすぎ、 の持つ理論的意義について語られている。著者によれば、分類とい 開放的権威類型では加入の機会がほとんどの人にあり、第二次集団 後者の基準による分類を考えると、二つの項目を作ることができる そこでの新規加入は開放的か閉鎖的かということである。たとえば び勢力の参加と応答の次元である。権威類型の補充様式とは、それ は、権威類型の諸次元のうちでも枢要と考えられる、補充様式およ いという。このような立場から、著者が権威類型の分類に用いるの (4)相互に牴触することがないという、条件を満たさなければならな む複数の現象を分類しており、②すべてをいいつくしており(分類 論構築に役立ちうる分類とは、分類の各項目が、⑴多数の事例を含 ある。しかるに、従来の政治学が使用してきた分類は単一次元によ として有用であるなど、分類作業と理論構築の間には密接な関係が **う作業は理論的一般化の示唆を与えたり、理論化のための変数提供** への新規加入の制度的規制があるのかないのか、もしあるとすれば、 一般的理論の基礎としては使いにくいという欠点を有している。理 第四部と第五部では権威類型の型すなわち分類についてと、

元による分類は、下位者の(上位者に対する要求の表明という意味での) 摘できるのは政治的遂行(political performance)だけで あるとし 合して影響を及ぼしていることに注意する必要があるという。そし 類型を独立変数として扱うときには、権威類型の様々な 特 性 が 複 分を独立変教として権威類型全体を説明する場合である。次に権威 Ⅱ・権威類型の内部に独立変数を求める。これは権威類型の特定部 の特性、②社会の特性、③社会や社会的単位の動態があげられる。 的状況としては、権威類型の変数を包みこんでいる、⑴社会的単位 が考えられる。Ⅰ・権威類型の外部に独立変数を求める。かかる外 者はいう。権威類型を従属変数としてみれば、それには二つの場合 自体が、従属かつ独立の変数たりうることの認識も大切であると著 あるが、権威類型の理論的説明という点からは、権威類型の資質それ この応答が任意的か義務的かによつて分類可能であるとしている。 許されている所では、上位者からの何ほどかの応答があるはずで、 の存在を意味し、後者は恩恵の制度であると言えよう。また参加の るのかによつて、分類項目を立てることができる。前者は投票制度 参加が制度的に認められるのか、それとも特例的に参加が認められ りの人々に限定されており、第一次集団に多くみられる。参加の次 に多くみられる。 わかるものは少なく、明確に権威類型からの影響を受けていると指 て、権威類型の影響を受けているものは種々あろうが、はつきりと ところで、分類の作業は主に理論化をめざして行なわれるわけで 閉鎖的権威類型 では 加入が一人 またはひとにぎ

ば、社会的単位とその特殊形態としての権威類型のなかで、常に支 ば、支配服従や指導追従という現象を集合体レベルで全体的に捉え ただけたであろう。本書で用いられた分析枠組の特徴を考えてみれ 指導―追従関係の一般的解明をめざす基礎作業にあることは理解 だつた理論の検証や構築にあるのではなく、支配―服従関係ないし 言われてみれば当然の論理展開をしているにすぎないと感じられる に様々な分析用具(著者の用語では諸次元)を開発する本書の方法は、 え、集合体を少数の上位者と多数の下位者に分け、両者の関係を軸 支配や指導は集合体との関係でしか論じ得ないことになる。それゆ 配と服従、指導と追従という関係は常に集合体を形成する。従つて、 配や指導が論じられる点が大きな特色であると言える。確かに、支 ようとしている点にある。集合体の表現を著者の用語に言いかえれ 析枠組を出発点にして、さらなる充実をはかれば、広い意味での権 けるならば、高い評価を与えることができよう。本書に示された分 的事例の分析には、それらが試論的性格を有するとのただし書をつ る。この意味において、本書で示された分析枠組とそれに基く具体 然と思われることが、これまでほとんどなされてきていないのであ いる点こそ、本書の価値あるところと言えよう。なぜならば、この当 にしても、一応の組織だつた分析枠組として一貫した論理展開して 的不十分性を少しずつ埋めてゆく作業によつてなすことができるは 枠組を発展させるもくろみは、局面と次元の構成に散見される論理 力関係の分析に多いに寄与することになるであろう。 さて、以上の簡単な紹介からもわかるように、本書の目的が体系 いまある分析

ることは十分に考えられる。こうした人格的要素を分析枠組に組み 間の性格や行動様式などが、支配や指導の形態に大きく影響してい ることでもあり、上位者という人間の資質や能力、下位者という人 しないかという懸念がある。著者も、上位者どうしの分析をしてい けだが、これをそのままに放置しておくと、分析が平面的になりは 言う権威類型は常に上位者と下位者という類型で分析されているわ ずである。ただその際に、ひとつコメントを加えるならば、著者の

こんでゆくことが、残された大きな課題になると思われる。

野寿 亮